

聖書：エペソ人への手紙6章5～9節

説教：奴隷たちよ

はじめに

私が会社員勤めをしていたときに、ここを読んで複雑な思いをしました。私の上司が毎日胃が痛くなるくらいプレッシャーをかけてくる毎日でした。そんな上司でも喜んで仕えなければならないのか。とても納得できなくて、できればこの箇所は飛ばして読みたい。それが正直な感想でした。会社や学校で人を使う立場にある方、人に使われる立場にある方、いろいろな立場がありますが、ここを読むときにいろいろな引っかかりを感じるでしょう。

そしてここを読んでもう一つ疑問なのは、この手紙を書いたパウロが奴隷は奴隷のまま、主人は主人のままでいなさいと言っていることです。奴隷制度を廃止せよとは言わないのです。主は、人を差別なさらないというのなら、奴隷制度をなくせと言うべきではないのか。聖書は、人権というような思想がまだなかった時代に書かれたので、そういうところは遅れていたということなのでしょう。そんなはずはありません。ではどのようなことなのか。ともに見てまいります。

1 奴隷

1) 境遇

今は日本には奴隷制度はありませんが、かつては借金を返すために農家の若い娘がお金で売られていくということがありました。聖書の時代は、戦争に負けたためとか、やはり借金を返せないという理由で奴隷となる人たちがいました。ある資料によれば、ローマ帝国の全人口の三分の一が奴隷であったとも言われています。その奴隷たちの境遇ですが、私たちはなんとなく鎖でつながれて暗いところに押し込められて自由がない。そんな悲惨な状態を想像してしまいます。当時、奴隷は主人の財産で、主人の下から逃げることはできないという制約は確かにありました。しかし、それ以外はふつうの生活ができて、財産を蓄えたり結婚もできたそうです。この手紙でも、「奴隷たちよ」と呼びかけているのは、教会の礼拝に奴隷たちが集まっていたからです。つまり奴隷たちにも、信教の自由が保証されていたということです。

2) 主人に従いなさい

その奴隷たちに5～7節でこう語ります。「奴隷たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。ご機嫌取りのような、うわべだけの仕方ではなく、キリストのしもべとして心から神のみこころを行い、人にではなく主に仕えるように、喜んで仕えなさい。」上司が、人間的によくできて信頼ができるというのなら悩むことはないでしょう。しかしよくありがちなことですが、気難しいとか、部下のことを理解してくれないとか、理不尽なことを言う、大声で怒るとか、そんな上司でも真心から従わなければならないのか。まして、喜んで仕えるなどとてもできない。それが正直なところでしょう。上司との関係のことで悩んで聖書に何か答えがあるかと思ったら、もっとつらいことが書いてある。これではがっかりです。どうしたらよいのか。そのことはひとまずわきに置いて、次に主人のことを見ていきましょう。

2 主人たちよ

1) 同じようにしなさい

9節前半を読みます。「主人たちよ。あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい。脅すことはやめなさい。」ここで注目したいのは、「あなたがたも奴隷に対して同じようにしなさい」というところで、この箇所の核心部分だと。同じようにとは何を指すかです。さきほど、5節から7節で奴隷たちはこうしなさいということを行いました。そのことばがそのまま主人にもあてはめなさいということです。つまりこうなる。「主人たちよ。キリストに従うように、恐れおののいて真心から奴隷に接しなさい。うわべだけの接し方ではなくキリストのしもべとして心から神のみこころ行い、主に仕えるように喜んで、奴隷を扱いなさい。」

2) 脅すことはやめなさい

そうしたら、奴隷を脅すというようなことはしなくてよいですね。そのようにつながります。先ほども言ったように、奴隷は主人の財産ですから、奴隷をことばで脅すとか暴力的な扱いをしてもかまわない。そんなふうに思われていた時代です。そんな時代に、主に仕えるように奴隷を扱いなさい。脅すことはやめなさい、と言うのですから、聞いて

いた人たちはたいへん驚いたのではないかと想像します。

ここまでのことをまとめると、奴隷は、「キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい」と言われ、主人も、「奴隷に対して同じようにしなさい」と言われている、ということでした。奴隷と主人、立場はまったく違いますが、いずれも中心にあるのはキリストに従うということです。どうしてここにキリストが出てくるのか。それを知るために、この手紙が書かれた事情を簡単に振り返ってみます。

3 キリスト

1) 奴隷も主人も共同の相続人になる

この手紙の宛先であるエペソは、地中海に面する大きな商業都市ということもあり、いろいろな国籍の人たちが住んでいました。ですから教会にも人種や言語が異なる人たちが集まってくる。そこで起きた問題が、ユダヤ人と異邦人との信仰の捉え方の違いでした。ユダヤ人はこう言いました。異邦人も律法を守って割礼を受けるべきである。どうすべきか、教会は混乱します。問題はそれだけではない。教会には、夫と妻、両親と子ども、そして主人と奴隷。いろいろな立場の人たちが集まってきます。そんなひとり一人の立場の違いを信仰的にどう取り扱ったらよいのか。教会が建てられてまだ間もない頃でしたから、ノウハウがない。そこで困ってしまった。

それでパウロがこの手紙を書いて、まず問題を扱う上での大前提を確認しました。3章6節です。「福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人も共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になるということです。」

これまで、異邦人とユダヤ人、夫と妻、子どもと両親のことを取り扱ってきましたが、すべてこの約束に立ちながら、あなたがたはこうしなさいと語ってきました。奴隷と主人の関係についても前提は変わりません。奴隷であろうが主人であろうが共同の相続人になり、ともに同じからだに連なって、ともに約束にあずかる者になる。この前提に立って問題を取り扱っています。

2) 天におられる主は差別しない

このことが9節後半のことばとつながっています。「あなたがたは、彼らの主、またあなたがたの主が天におられ、主は人を差別なさらないことを知っているのです。」

奴隷であろうとも主人であろうとも共同の相続人となり、ともに同じからだに連なり、ともに天の御国の約束をいただく。天におられるキリストは人を差別なさらない。そのようにしてくださるキリストを、奴隷も主人も見上げなさいと言っています。キリストはどうされたか。キリストは差別なさらない。だったら主人であるあなたは、奴隷を冷たく扱うことはできなくなるでしょう。奴隷の立場にある人たちもそうです。キリストが、ご自分のいのちを差し出して救ってくださった方だとわかったなら、主人のご機嫌を取って、うわべだけの仕え方はしますか。いや、もうしないでしょう。そう言っている。

3) キリストを見上げて忠実に仕える

でもどうでしょうか。会社で働いている人たちは、素直に聞くことができるでしょうか。私も悩みました。特に「喜んで仕える」というところで引っかかりました。これはちょっと誤解を与える。もともとという言葉には、「忠実に」という意味があるので、「忠実に仕える」と訳した方がよいと思います。心にもないことを言って上司の機嫌をとる。それはうわべだけ忠実な部下を演じているだけ。神に嘘をついているということです。そうではなくて、裏表なく正しいことを正しく行い、仕事のことで失敗しても誤魔化したり嘘はつかない。ほかの人の責任を押しつけず、きちんと引き受けていく。それが忠実に仕えるということになります。毎日、仕事場で、あなたはキリストに従っているかと信仰が問われていく。つらいことではありますが、そのようにして私たちの信仰が練られて、確かなものに変えられていくのだと思います。

4) 主のみこころが地に実現していく

最後に残った疑問です。どうしてパウロは奴隷制廃止を唱えなかったのか。ここを読む限り、確かにそのように見えます。でも考えてみましょう。もし主人が、「奴隷に対し同じようにしなさい」という命令をそのまま実行しようとしたらどうなると思いますか。いままでのように、奴隷は自分がどのように好き勝手にできる財産だと言えるでしょうか。キリストのしもべとして心から神のみこころを行うようにとされていることを、真剣に受けとめるなら、今までと同じようにはできない。奴隷としてではなく、あなたも私も神の前では信仰者である。やがて一つとされていくお互いである。そのように見ていくことになるでしょう。

そうしたらどうなるでしょう。今すぐではないにしても、その先に主人も奴隷もない世界が実現していくではないですか。こうして主のみこころが実現していくのです。これが聖書の語っていることです。

人を使う立場にある人も、人に使われる立場にある人もそれぞれの場所で、同じ一人の救い主を見上げながら、主のみこころがなる日、約束の日を待ち望みながら歩んでまいりましょう。